

[D年] 聖霊降臨節第4主日(2020年6月28日)

【旧約聖書日課】ミカ書 4章1～7節

1 終わりの日に

主の神殿の山は、山々の頭として堅く立ち、  
どの峰よりも高くそびえる。  
もろもろの民は大河のようにそこに向かい

2 多くの国々が来て言う。

「主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。  
主はわたしたちに道を示される。  
わたしたちはその道を歩もう」と。  
主の教えはシオンから  
御言葉はエルサレムから出る。

3 主は多くの民の争いを裁き

はるか遠くまでも、強い国々を戒められる。  
彼らは剣を打ち直して鋤とし  
槍を打ち直して鎌とする。  
国は国に向かって剣を上げず  
もはや戦うことを学ばない。

4 人はそれぞれ自分のぶどうの木の下

いちじくの木の下に座り  
脅かすものは何もないと  
万軍の主の口が語られた。

5 どの民もおのおの、自分の神の名によって歩む。

我々は、とこしえに  
我らの神、主の御名によって歩む。

6 その日が来れば、と主は言われる。

わたしは足の萎えた者を集め  
追いやられた者を呼び寄せ。  
わたしは彼らを災いに遭わせた。

7 しかし、わたしは足の萎えた者を

残りの民としていたわり  
遠く連れ去られた者を強い国とする。  
シオンの山で、今よりとこしえに  
主が彼らの上に王となられる。

【使徒書日課】ヘブライ人への手紙 12章18～29節

18-19あなたがたは手で触れることができるものや、燃える火、黒雲、暗闇、暴風、ラッパの音、更に、聞いた人々がこれ以上語ってもらいたくないと願ったような言葉の聲に、近づいたものではありません。20彼らは、「たとえ獣でも、山に触れば、石を投げつけて殺さなければならぬ」という命令に耐えられなかったのです。21また、その様子があまりにも恐ろしいものだったので、モーセすら、「わたしはおびえ、震えている」と言ったほどです。22しかし、あなたがたが近づいたのは、シオンの山、生ける神の都、天のエルサレム、無数の天使たちの祝いの集まり、23天に登録されている長子たちの集会、すべての人の審判者である神、完全なものとされた正しい人たちの霊、24新しい契約の仲介者イエス、そして、アベルの血よりも立派に語る注がれた血です。

25あなたがたは、語っている方を拒むことのないように気をつけなさい。もし、地上で神の御旨を告げる人を拒む者たちが、罰を逃れられなかったとするなら、天から御旨を告げる方に背を向けるわたしたちは、なおさらそうではありませんか。26あときは、その御声が地を揺り動かしましたが、今は次のように約束しておられます。「わたしはもう一度、地だけではなく天をも揺り動

かそう。」27この「もう一度」は、揺り動かされないものが存続するために、揺り動かされるものが、造られたものとして取り除かれることを示しています。28このように、わたしたちは揺り動かされることのない御国を受けているのですから、感謝しよう。感謝の念をもって、畏れ敬いながら、神に喜ばれるように仕えていこう。29実に、わたしたちの神は、焼き尽くす火です。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 4章5～26節

5それで、ヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近くにある、シカルというサマリアの町に来られた。6そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた。正午ごろのことである。

7サマリアの女が水をくみに来た。イエスは、「水を飲ませてください」と言われた。8弟子たちは食べ物を買うために町に行っていた。9すると、サマリアの女は、「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と言った。ユダヤ人はサマリア人とは交際しないからである。10イエスは答えて言われた。「もしあなたが、神の賜物を知っており、また、『水を飲ませてください』と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。」11女は言った。「主よ、あなたはくむ物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。12あなたは、わたしたちの父ヤコブよりも偉いのですか。ヤコブがこの井戸をわたしたちに与え、彼自身も、その子供や家畜も、この井戸から水を飲んだのです。」13イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。14しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」15女は言った。「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」

16イエスが、「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい」と言われると、17女は答えて、「わたしには夫はいません」と言った。イエスは言われた。「『夫はいません』とは、まさにそのとおりだ。18あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。あなたは、ありのままを言ったわけだ。」19女は言った。「主よ、あなたは預言者だとお見受けします。20わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。」21イエスは言われた。「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。22あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからだ。23しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。24神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」25女が言った。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。」26イエスは言われた。「それは、あなたと話をしているこのわたしである。」

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## ミカ書 4章1〜7節

## 1 終わりの日に

主の家の山は、山々の頭として堅く立ち  
どの峰よりも高くそびえる。  
そして、もろもろの民が川の流れるように  
そこに向かい

## 2 多くの国々が来て言う。

「さあ、主の山、ヤコブの神の家に登ろう。  
主はその道を私たちに示してくださる。  
私たちはその道を歩もう」と。  
教えはシオンから  
主の言葉はエルサレムから出るからだ。

## 3 主は多くの民の間を裁き

遠く離れた強い国々のためにも判決を下される。  
彼らはその剣を鋤に  
その槍を鎌に打ち直す。  
国は国に向かって剣を上げず  
もはや戦いを学ぶことはない。

## 4 人はそれぞれ自らのぶどうの木

いちじくの木の下に座り  
脅かす者は誰もいないと  
万軍の主の口が語られる。

## 5 どの民もおのおの、自らの神の名によって歩む。

私たちは私たちの神、主の名によって  
とこしえに歩む。

## 6 その日には、私は足の萎えた者を集め

追いやられた者  
私が災いに遭わせた者を呼び集める——主の仰せ。

## 7 私は足の萎えた者を残りの者とし

遠くに連れ去られた者を一つの強い国民とする。  
主はシオンの山で、今より、とこしえに  
彼らの王となられる。

## ヘブライ人への手紙 12章18〜29節

18あなたがたは、手で触れることができるものや、燃える火、密雲、暗闇、暴風、19ラッパの音、また、人々がこれ以上耳にしたくないような大声の言葉に、到達したのではありません。20彼らは、「たとえ獣でも、この山に触れば、石で打ち殺されなければならない」という命令に耐えられなかったのです。21また、その光景があまりにも恐ろしかったので、モーセは、「私は恐れ、震えている」と言いました。22-23しかし、あなたがたが到達したのは、シオンの山と生ける神の都、天のエルサレム、無数の天使たち、天に登録されている長子たちの大集会、すなわち教会、すべての人の審判者である神、完全な者とされた正しい人たちの霊、24新しい契約の仲介者イエス、それに、アベルの血より優れたことを語る注がれた血です。

25語っている方を拒むことのないように気をつけなさい。もし、地上で御旨を告げる人を拒んだ者たちが、罰を免れなかったとすれば、天から御旨を告げる方に背を向ける私たちは、なおさらそうではありませんか。26あのときは、その御声が地を揺り動かしましたが、今はこう約束しておられます。「もう一度、私は地だけではなく天をも揺り動かす。」27この「もう一度」という言

葉は、揺り動かされないものが存続するために、揺り動かされるものが、造られたものとして取り除かれることを示しています。28このように、私たちは揺るがされない御国を受けているのですから、感謝しましょう。感謝しつつ、畏れ敬いながら、神に喜ばれるように仕えていきましょう。29実に、私たちの神は、焼き尽くす火です。

## ヨハネによる福音書 4章5〜26節

5それで、イエスはヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近くにある、シカルというサマリアの町に来られた。6そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた。正午ごろのことである。

7サマリアの女が水を汲みに来た。イエスは、「水を飲ませてください」と言われた。8弟子たちは食べ物を買うために町に行っていた。9すると、サマリアの女は、「ユダヤ人のあなたがサマリアの女の私に、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と言った。ユダヤ人はサマリア人とは交際していなかったからである。10イエスは答えて言われた。「もしあなたが、神の賜物を知っており、また、『水をください』と言ったのが誰であるかを知っていたならば、あなたのほうから願い出て、その人から生ける水をもらったことであろう。」11女は言った。「主よ、あなたは汲む物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生ける水を手にお入れになるのですか。12あなたは、私たちの父ヤコブよりも偉いのですか。ヤコブがこの井戸を私たちに与え、彼自身も、その子どもや家畜も、この井戸から飲んだのです。」13イエスは答えて言われた。「この水を飲む者は誰でもまた渇く。14しかし、私が与える水を飲む者は決して渇かない。私が与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水が湧き出る。」15女は言った。「主よ、渇くことがないように、また、ここに汲みに来なくてもいいように、その水をください。」

16イエスが、「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい」と言われると、17女は答えて、「私には夫はいません」と言った。イエスは言われた。「『夫はいません』』というのは、もっともだ。18あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。あなたの言ったことは本当だ。」19女は言った。「主よ、あなたは預言者だとお見受けします。20私どもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。」21イエスは言われた。「女よ、私を信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。22あなたがたは知らないものを礼拝しているが、私たちは知っているものを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからだ。23しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真実をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。24神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真実をもって礼拝しなければならない。」25女は言った。「私は、キリストと呼ばれるメシアが来られることを知っています。その方が来られるとき、私たちに一切のことを知らせてくださいます。」26イエスは言われた。「あなたと話をしているこの私が、それである。」

## 黙想のためのノート

## 次主日聖書日課について

・6月28日「聖霊降臨節第5主日」の日課主題は「天のエルサレム」。「天のエルサレム」という表現は、新約中2例知られる(ガラテヤ4:26、ヘブライ12:22)。「エルサレム」は、福音書およびパウロ書簡で頻繁に用いられるが、上記の例を除けばほとんどの場合に実際に当時のユダヤの都市として栄えた「エルサレム」を指して用いられている。一方、ヨハネ黙示録は「新しいエルサレム」(3:12、21:2。また21:10も関連)という表現で固有の地名としてではない、神学概念としての「エルサレム」を用いており、初代教会において一定程度の広がりをもって、特別な意味を持たされた霊的な「エルサレム」という神学概念が共有されはじめていたと考えられる。

・「エルサレム」は、旧約中ではヨシュア記10章に初めて登場するが、ヨシュアがイスラエルの民をカナン地方に入植させた時代、そこはエブス人の王が支配する町であったとされている。士師記1章によると、その後、エルサレム周辺を領地としたベニヤミン族はエルサレムに侵攻したが、エブス人を排除せずに共存の道を選んでいる。「エルサレム」がイスラエルにとっての「都」の地位を得るのは、ユダ・イスラエル連合王国を樹立したダビデ王が王座を置いてからである(サムエル下5:5)。ダビデは、王位にあった40年のうち最初の7年は南部の「ユダ」のみの王であり、残りの33年を「ユダ」および北部の「イスラエル」の王として支配した。それは、前王サウルが嫡男ヨナタンと共にペリシテ軍との戦闘で戦死したのに伴い、ユダ族がダビデを後継の王としたのに対して、他の部族がサウル王家を支持し続けたからであったが、サウル王家の後継者イシュ・ボシェトが暗殺された後に、全部族がダビデを王と認めることになった(イシュ・ボシェトの暗殺はダビデの指示によるものではなかったもので、ダビデは暗殺の実行者らを処刑している)。それに伴って、ダビデは「エルサレム」からエブス人を排除して、自らの王座を置いた。それは、サウル王家がベニヤミン族出身であり、「エルサレム」はベニヤミン族の領域であったからであろう。この都「エルサレム」に宮殿および神殿が建設されるのは、ダビデの後継者ソロモン王の時代である。ダビデ・ソロモンの時代は、「イスラエル正史」において最も理想的な時代とみなされている。しかし、ソロモン王の没後、再びユダ族と他部族との間に亀裂が入り、北部十部族はエフライム族出身のヤロブアムの下に「イスラエル」を名乗る北王国を分離独立させ、「エルサレム」とは異なるところを都および礼拝地と定めた(都は変遷があるが、礼拝地は、金の子牛像が設けられたベテルとダンを中心に、ヤコブに由来する古い聖地が重んじられたと考えられる)。この北王国がオムリ王朝時代に建設した都が「サマリア」で、「エフライム」と共に北王国およびその国民を

象徴する呼び名として用いられるようになった。後代、南王国ユダ族を中心とした人々の末裔として続いた「ユダヤ人」の立場からは、「サマリア」は、「反エルサレム」に等しい蔑称として用いられた。

・ダビデによって建設され、ソロモンによって完成された都および礼拝地としての「エルサレム」は、南王国がバビロニアに滅ぼされるに際して陥落し、破壊されている。バビロン捕囚を経た後、南王国の人々(ユダヤ人)がペルシャによって解放されると、エルサレムに「神殿」を再建することが許されるが、政治的な「都」としての再建は叶わなかった。紀元前2世紀に起こったユダヤ人の独立戦争(対シリア)でマカベア王朝が樹立するとエルサレムを「都」とする独立を100年ほど保つが、この王朝はイドマヤ人「ヘロデ王」に継承されたのを最後に断絶し、ローマ帝国の直轄地となる。新約聖書の時代は、「神殿」が維持されながら政治的には完全にローマに服従した時代であったが、武装蜂起によって政治的独立を目指した「ユダヤ戦争」(66-70年ごろ)の結果、「エルサレム」は神殿もろとも完全に破壊された。その後、神殿が再建されることなく今日に至っている。新約文書は、この最後の「エルサレム」破壊の前後に著された文書集であり、なお「神殿」の存する都市としての「エルサレム」を前提にしている文書と、「エルサレム」の破壊をすでに経験した後に記された文書とが含まれている。

## 旧約日課(ミカ4章より)

・「ミカ書」は、「十二小預言書」の6番目に置かれた、「イザヤ書」のイザヤと同時代(紀元前8世紀後半~7世紀前半)に預言活動をした預言者ミカの預言集であり、「イザヤ書」との共通点が少なくない。ことに、日課箇所前半(ミカ4:1~3)は、イザヤ2:2~4とほぼ同じ句が用いられており、イザヤとミカが同じ伝統・伝承を共有する預言者集団に属していたことが分かる。「預言者・モレシェトの人ミカ」については、「エレミヤ書」(26:18)で言及され、「ミカ書」(3:12)の引用もされているように、後代の預言者集団にまで一定の影響を与えた存在だったと考えられる。

・預言者ミカは、預言者イザヤ同様、南王国で活動した預言者であり、「エルサレム至上主義」的な視座を有している。これは、聖地としての至上主義というよりは、「神の箱」の所在地としての至上主義である。「神の箱(主の箱)」は、古い伝承でモーセの時代にシナイ山で与えられた「二枚の掟の刻まれた石の板」および「マナの壺」と「アロンの杖」が収められ、神の臨在の象徴として祭司が聖所内で保管してきたとされるものである。荒れ野の四十年の旅の間は「臨在の幕屋」で保管され、カナン定住後は「シロの聖所」に建設された神殿に納められたが、サウル王が登場する直前の時代にペリシテ軍にシロの神殿を破壊され奪われるという事件があり、奪還後は「アビナダブの家」が預かっていた。これを、ダビデ王がエルサレムを都として

建設した際に運び込ませ、ソロモン王が建築した神殿の至聖所に収められることになった。預言者らが語る「エルサレム至上主義」は、この「神の箱」の所在を抜きにはありえない思想で、そこに収められた「二枚の石の板」に刻まれた「掟」と、それに伴って神から授けられたとされる教え集＝「律法(トーラー)」の源泉として「エルサレム」が象徴的に信仰の中心に置かれるようになったのである。それは、「神の箱」の収められたエルサレム神殿に仕える祭司こそが、「主の教え」「御言葉」を託され、告げる「預言者」たりうるという思想にもなっている。

・この視点で見たときに興味深いのは、ミカもイザヤも、エルサレム＝シオンを「主の山」と呼び、そこにある聖所を「ヤコブの神の家」と呼んでいることである。「ヤコブの神の家」は本来「ベテル」のことであり(創 28 章)、北王国では「金の子牛像」が建立された聖地である。ミカら預言者は、「ヤコブの神の家」と呼ばれるべき機能を有する地を、故事にちなむ「ベテル」から、「神の箱」の所在する「エルサレム」に置き換えているのである。預言者らにとっては、神の「教え」や「御言葉」を聞くことこそが、ヤコブの経験した神と相対する信仰体験であると考えられたからであろう。

#### 使徒書日課(ヘブライ 12 章より)

・「ヘブライ人への手紙」は、新約文書中、特に旧約を厳密に解釈することによってキリストの救いの御業(贖罪)を理解することに努めた点で特異な文書である。本書簡が「贖罪」論を厳密に扱うのは、人がいかにして神に近づくことが可能なのかという問題に焦点を当てているからである。

・日課箇所では、「出エジプト記」(19 章)に物語られるシナイ山でモーセが主の律法(教え)を授与される場面を引用する形で、今や主イエス・キリストの贖罪行為によって人の罪が問われることがなくなったので、人は神に近づけると主張している。

・ここでは、モーセが主の律法(教え)を授けられたシナイ山が、「シオンの山」「生ける神の都」「天のエルサレム」「無数の天使たちの祝いの集まり」「天の登録されている長子たちの集会」などに置き替えられており、これら終末的なイメージで理解される事々が結局のところシナイ山でモーセが体験したとされること(御言葉を直接聞く体験)をこそ意味しているのだと理解するように教えられている。

#### 福音書日課(ヨハネ 4 章より)

・日課箇所は、「サマリアの女」の逸話の前半部。一般に「サマリア人の訳ありの女性の個人的な救いの体験の物語」として読まれることが多いが、実際には、旧約で預言者らが問い続けた「礼拝のあり方」に関する問題に対する新しい解釈を提示するという、壮大な神学主題を盛り込んだ、きわめて象徴性の高い物語となっている。次主日日課、次々主日日課では連続する箇

所が充てられており、三週にわたってこの「物語」を扱うが、少しずつ視座を変えて見ていく。

・物語は、「サマリアの町」という場面設定から始まり、「礼拝すべき場所」の議論に至る。「シカル」という町の名は特定されていないが、シリア語版ヨハネ福音書では「シケム」と読み替えており、おそらく族長物語(創世記)でも繰り返して出てくる「シケム」周辺の町を指している。「シケム」は、地理的にはゲリジム山とエバル山に挟まれた地にあり、「モレの榿の木」がある聖地で、アブラハムが父の家のあったハランを出て最初に祭壇を築いた地(創 12:6~7)。孫のヤコブは、ハランへの逃避行から帰還して兄エサウと和解した後に、しばらく「シケム」に滞在し、祭壇を築いている(創 36:18~19)。モーセの後継者ヨシュアは、カナン入植後、エバル山とゲリジム山を臨む地(シケム周辺?)に民を集めて「モーセの教えの書」の朗読をさせ(ヨシュア 8 章)、また、最後の告別の辞を述べるために民をシケムに集めている(ヨシュア 24 章)。さらに、ダビデ・ソロモンのユダ・イスラエル連合王国がソロモンの没後に分裂したとき、北王国を樹立したエフライム族のヤロブアムは、シケムに自らの居(王座)を構えている(王上 12:25)。このような経緯を経て、シケムは北王国の精神的支柱として機能し、その山「ゲリジム山」が「サマリア」の人々の礼拝の中心となっていった。日課箇所では「ヤコブの井戸」から水を得ることが問題になるのは、サマリアの人々にとって、そこに霊的な命の源泉があるという了解事項があったからである。このことが、ユダの人々(ユダヤ人)にとってのエルサレムと対照された上で、両者を相対化する「まことの礼拝」をイエスが提示する、と描かれているのである。

#### 来週の誕生日(6月28日~7月1日)

#### 主日礼拝の讚美歌から

・21-560 番「主イエスにおいては」(= I 419 番「主イエスにありては」)は、英国の作家ジョン・オクセナムの作詞で、『讚美歌 21』編纂に際して改訳されている。曲は、19 世紀英国の音楽家 A・レイナグルの作曲で、94 番でも使用。

#### 21-560「主イエスにおいては」

#### *In Christ there is no East or West*

1. In Christ there is no east or west, / in him no south or north, / but one great fellowship of love / throughout the whole wide earth.
2. In Christ shall true hearts everywhere / their high communion find; / his service is the golden cord / close-binding humankind.
3. Join hands, disciples of the faith, / whate'er your race may be. / All children of the living God / are surely kin to me.
4. In Christ now meet both east and west; / in him meet south and north. / All Christly souls are one in him / throughout the whole wide earth.